

現代語訳の功罪

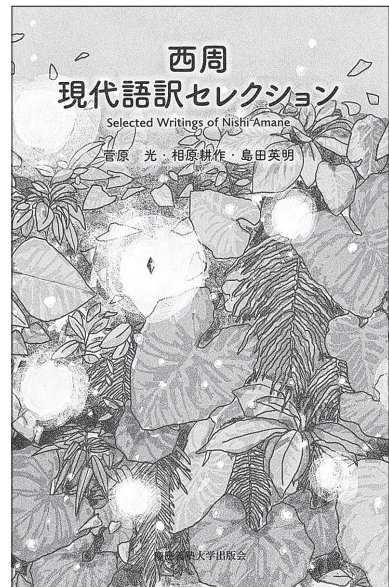
菅原光・相原耕作・島田英明訳『西周 現代語訳セクション』

(4/6判・320頁, 慶応義塾大学出版会, 2019年)

菅 原 光 (専修大学法学部教授)

1. はじめに

池に落ちそうな子供がいれば「あっ、危ない」と感じて助けようとしたり, 少なくとも助けなければならないという思いを瞬間的に生じさせる。人ならば誰しもそうである。人が皆, 善なる性質を持っていることの証である。『孟子』公孫丑上編に基づく議論である。しかし, 「このまま池に落ちて死んでいく姿を見たい」と思う人間が多数派だとまで言う人はいないとしても, そのような人間がいること自体は否定できない。ネグレクトや虐待は, 例外中の例外だとは言えないほどにありふれた日常になっており, 人間が善人ばかりだとは到底思えない現実がある。『孟子』はそのような現実を捉え得ていなかったのだろうか。しか



し『孟子』梁恵王上篇にはまた, 「生活が安定していなければ心も安定しない」という趣旨の言葉がある。自尊心を保てなくなるほどの貧困状態, そしてまた周囲からのサポートがないといった条件があれば, ネグレクト, 虐待に及んでしまうような親が存在し得ることは『孟子』において想定済みのことだったと言えよう。子を虐待し死にまで至らしめる親がいるのは事実だとしても, その親でさえ, そのことを心の底から喜び楽しんだわけではあるまい。後悔の念や, いたたまれなさを感じるの方が多いのではないだろうか。心の中に有している善なる心と自らの行動との間に解離があるからである。とするならば, 当人を社会から隔離したり罰したりすることを求める

よりも先に、生活の安定という条件を整えることが求められる。それこそが政治の役割である。ネグレクトや虐待の問題は、それを為した親の問題として議論すべきではない。本来は善であり、子を慈しみ愛して育てているはずの人々に虐待という行為を為さしめた環境、そのような環境を改善しなかった政治の責任にこそ焦点を定めるべきだ。儒教ではそう考える。拙稿「理と利」に基づく記述である¹⁾。儒教の議論は、古くさい身分制道徳などではなく、現代的な意義を有するものであることが了解していただけるのではないだろうか。しかし同時に、このような説明が『孟子』理解として正当なものかどうかには不安がある。このような翻訳に基づいた説明によって失われてしまう何かがあるのではないかという懸念もある。使用されている用語や文体が失われる懸念が少なくなるよう、「今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心」と原文通りに、あるいはせめて「今人乍チ孺子ノ將ニ井ニ入ラントスルヲ見レバ、皆怵惕惻隱ノ心有リ」と書き下して引用すべきだったのかもしれない²⁾。しかしそれで、先の説明を聞いた時と同じように、この議論の現代的な意義を了解してもらうことが可能だろうか。そもそも、日常的に井戸を使っている現代日本人は多くはないし見たことも使ったこともないという人も少なくなっている現状において、「井戸」という具体例が通用するという前提を維持し続けても良いのだろうか。「井戸」は、人気ロールプレイングゲームである『ドラゴンクエスト』の世界にある、縄を伝って降りていき「小さなメダル」を拾うためのものとしてしか理解されていない場合もあるかもしれない。今となっては記憶も曖昧だが、「井戸に落ちそうな子供」とすべきところを「池に落ちそうな子供」と表現しているのはそのような疑問の反映だったのではないかと推測できるが、それは許すべからざる改変だったように思う。「井戸」と表記したままで、注を付すべきだったのではないだろうか。しかしそれは、「井戸」が身近にあった世代の者にとっては、思い付きにくいのみならず、違和感も残る発想である。

本稿は、『西周 現代語訳セレクション』出版に合わせ、自著紹介のような文章を寄稿するようにとの編集部からの依頼に応じて執筆したものである³⁾。しかし、訳書と

1) 菅原光「理と利」米原謙編『「まつりごと」から「市民」まで』（晃洋書房、2017年）。

2) 原文、書き下し文、現代語訳との関係については、渡辺浩「John Mountpaddy 先生はどこに」『UP』38巻1号参照。

3) 菅原光、相原耕作、島田英明訳『西周 現代語訳セレクション』（慶応義塾大学出版会、2019年）。西周が著した哲学関係の論考を、明治大学の相原耕作先生、九州大学の島田英明先生の協力を得て現代語訳したものである。西周（1829～1897年）は、江戸時代末期から明治時代初期にかけて活躍した思想家であり、日

はいえ、「はじめに」や「解題」によって読者に伝えるべきことは伝えきったはずであり、それについて改めて語ることに躊躇する思いがあった。そのため、本書に興味を持ってくれた政治学科の同僚である前川亨先生、川上洋平先生との鼎談を実施し、その記録を掲載させていただくという計画を立てていたが、コロナ禍によって鼎談自体を実現させることができなかった。そこで、原史料の現代語訳という、本書が実践した試みの功罪を論じるという形で依頼に応じることにしたい。同書出版後に「翻訳語の問題」「翻訳語」というテーマでの執筆依頼に応じて寄稿する機会があり、現代語訳も含まれ得る「翻訳」という問題を改めて考えてみたことがこの判断に影響を与えている部分がある⁴⁾。それらの内容と重複する部分があることをあらかじめお断りしておきたい。

2. 翻訳語の功罪

ジョージ・オーウェルは『1984年』(*Nineteen Eighty-Four*, 1949.)において、権力による徹底した支配が貫徹されている極限的な世界を描いた。その世界を成立させているツールのうちの1つに「ニュースピーク」と呼ばれる言語支配がある。英語を簡素化して成立するニュースピークは、意図的に語彙量を減少させるように作られており、それを用いる者達は反権力的な思いを抱くことはもちろん、現状に対する不満を感じることさえ不可能になっていた。例えば「自由」という語が抹消されることによって、この世界の人々は自由を求めることも自由について考えることもできなくなっている。「自由」という語の抹消は「自由」という概念の抹消をも意味しているからである。即座には了解し難い話のように思えるかもしれない。ならば、現在通用している語も概念もなかった時代のことを考えてみたらどうだろうか。例えば「個人」という語が明治時代になって発明され用いられはじめたindividualの翻訳語であることを想起していただきたい。それはつまり、江戸時代以前にはその語も概念も存在していなかったということである。「個人」という語は江戸時代にはなく、そうである以上、江戸時代の人々が「個人」に相当する事柄を考えることは難しかった。「個人」の原語である

本における「哲学の父」として、その名はよく知られている。しかし、それ以上のことが知られることはあまりなく、同時代に活躍した福澤諭吉とは比べようもない。福澤の代表作である『学問のすゝめ』や『福翁自伝』、『文明論之概略』を読んだことがあるという読者は珍しくないが、西周の場合、代表作の書名だけは知っているという読者でさえ、稀であろう。

4) 日本思想史事典編集委員会編『日本思想史辞典』(丸善出版, 2019年), 野口雅弘ほか編『よく分かる政治思想』(ミネルヴァ書房, 近刊予定)。

individualは、それ以上分けることのできない最小単位という意味を持つ概念だが、当時、国や天下を構成する最小単位は「家」であり「個人」ではなかった。家ごとに家職が決まっていた当時、人々は自分の家の職業を継ぐことを当然視しており、「個人」が職業を選択し得るなど考えることはなかった。武士に対する給与は家禄であった。それは家に対する禄であり、個人の働きに対する報酬ではなかった。「個人」が存在しなかった以上、個人によって構成される society に相当する語も存在しなかったのは当然である。江戸の人々にとっては、「個人」について考えることも「個人」が自発的かつ意識的に「社会」を形成するということを考えることも容易ではなかったはずである。

江戸時代末期以降の日本では、『1984年』の世界と正反対の事態が生じていた。職業を自由を選択することなど思いも寄らなかった人々が自由について考え、求めるようになった。自由という伝来の語がfreedomやlibertyという西洋由来の概念を表現するための翻訳語としても用いられるようになり、普及していったからである。自由という概念を知らずそれ故求めることもあり得なかった人々が、その語を獲得した途端、現状を問題あるものとして捉えだし自由を求め始めた。freedom/libertyを求めるという実態が先に生じ、それを表現するために自由という語が発明されたのではない。〈「社会」を構成する最小単位は「個人」である〉という発想が生成され、それを表現するために「社会」「個人」という語が発明されたのでもない。はじめに登場したのは言葉であった。自由という翻訳語が登場し、その後、最初は何のことか分からなかったはずの自由を人々が求めるようになったのである。「個人」という概念を知ることによって、家や共同体によって課せられていたくびきが可視化されていき、「個人」同士による自発的かつ意識的な結びつきとしての「社会」が形成され得る土台が出来上がったというように理解することができる。西洋由来の概念を指し示す翻訳語が発明され、それに応じて思考の幅そのものが広がっていったのである。

もちろん、翻訳語には副作用もあることは、今となっては認識しなければならない問題であろう。よく知られている問題は、日本人が翻訳語を通じて理解している内容と、原語が指し示す内容との齟齬である。翻訳語を用いて思考しているせいで、日本人には（西洋由来の）学問を正確には理解できないのではないかなどと言われることもある⁵⁾。freedom/libertyという原語が「勝手きまま」という意味を持つ伝来の日本語

5) 柳父章『翻訳語成立事情』（岩波新書、一九八二年）、薬師院仁志『日本語の宿命——なぜ日本人は社会科学を理解できないのか』（光文社新書、二〇一二年）など。

「自由」に置き換えられたことによって、日本では、「自由」は追求すべき理想であるよりも警戒すべきものとして認識されることの方が多い⁶⁾。「社会」を構成する最小単位であるはずのindividualが「個人」という語で表現され、集団そのものを忌避する一匹狼のように理解されるならば、individualとsocietyとの関係とは異なり、「個人」と「社会」とは逆方向のベクトルを持つ概念となる。「個人主義」は批判対象を名指すための語に成り下がらざるを得ない。

「訳書中に往々自由原語「リベルチ」通義原語「ライト」の字を用ひたること多しと雖ども、実は是等の訳字を以て原義を尽すに足らず」(『西洋事情 二編』(1870年))と述べた福澤諭吉(1834~1901年)のように、既にこの問題を認識していた思想家もいた。しかし、翻訳語が原義を尽くし得ていない可能性が忘却されるに従って、原語の世界では起こりにくい上記のような問題状況が発生するようになっていったことは否定し難い。しかも、翻訳語を介して思考していることに無自覚な場合、そのような問題が発生していること自体に気づき得ない。それは原書を読んでいる際にも起こり得る問題である。

もっと分かりやすい副作用は、翻訳語が学問のグローバル化を阻害しているかもしれないという問題である。生物学者の福岡伸一は、「奇妙な曲線を持つ蛇紋岩や輝くような緑閃石」、「台形や平行四辺形、因数分解や解の公式」、「支点、力点、作用点」などなど、様々な学術用語に相当する英単語が即座には思い付かず、海外の学者の前で自らの知見を表出することが容易ではなかったという経験を述べている⁷⁾。翻訳語の存在は、我々に逆翻訳のための多大な労力を割くことを強いる場面がある。最初から原語で理解し原語を用いて思考していれば、こんな問題はおこりようがなかったはずだが、幸か不幸かそうはならなかった。

このことには、専修大学の創立者達も関わっていた側面がある。法律の分野で用いられる基本用語の多く、例えば、「憲法」や「民法」、「立憲主義」とか「権利」「契約」といった語は、流入してきた西洋由来の概念に対する翻訳語として発明され定着してきたものである。それ以前には、それらの用語がなかったのみならず概念さえ存在していなかった場合もある。語自体は存在していたという場合でも、その意味合いは異なっており、伝来の語に原語の意味が付与されて用いられるようになったケースもある。

6) コロナ禍における行動制限を断固として拒否する態度をとりがちな欧米人と、権力による徹底した行動制限が為される中国と、自粛による一定程度の行動制限が実現する日本との相違は、「自由」理解に関わる問題なのかもしれない。

7) 『朝日新聞』2017年9月14日朝刊。

翻訳語がなくても原書を読めば西洋由来の知識や発想に触れることが可能だが、それを日本語で表現することは容易ではない。実際、明治前期の法律学校では、講義は外国語を用いて為されていた。当時の日本語の語彙では、法学の内容を表現することができなかったからである⁸⁾。この状況が続いていたならば、学問の場で日本語が使われることはなくなり、話す場合でも書く場合でも、常に英語（もしくは他の言語）のみが用いられることになっていったはずである。しかし、そうはならなかった。大学教育のグローバル化は、未だ遠く先にある課題である。日本語を用いた法学・政治学の教育を行うという理念を掲げて開校した専修学校（現専修大学）には、その意味での罪があると言えることができる⁹⁾。

しかし逆に、明治期に活躍した思想家達が翻訳語を発明してくれたことによって、多くの人々が、西洋由来の最先端の学術的知見にも容易に触れることができるようになった。外国語を自由自在に読解できる者でなければ学問の成果に触れることができず、国民の多くが法律や政治に関係する知識を得ることができなかった明治期と比べ、このことをどう捉えるべきだろうか。明治期においては、極一部のエリートとその他大勢の国民との間に、大きな知的格差が生じることは避けられなかった。翻訳語は、知の底上げに貢献した側面があり、今や、日本語のみを用いただけでも高水準の知を獲得できる現状が現出した。翻訳語の存在が学問のグローバル化を阻害し続けているかもしれないという副作用の裏面にある現実である。

3. 現代語訳という試みとその問題

数多くの翻訳語が生み出されたことによって、西洋語で書かれた書籍の日本語訳は、前野良沢らが『解体新書』を翻訳した時とは比較にならないほど容易になった。現に、西洋の古典の多くが、話題の新刊本の多くが、時を置かずに和訳出版されている。し

8) 現在でも、「権利」や「契約」といった基本用語を用いてはならないという条件が課せられたならば、法学部の講義は成り立ち得ないだろう。基本用語の部分だけは原語を用いて講義するということにするとしても、それはほとんどお笑いタレントのルー大柴のような話しぶりになるはずである。

9) その2年後には東京専門学校（現早稲田大学）が同じ理念を掲げて開学するなど、日本語を用いた法学教育を実施するのは専修学校のみではなくなっていった。その意味では、専修学校のみに罪があるというわけではない。専修大学大学史資料室には、創立者のうちの1人である目賀田種太郎による『法詞訳集』という未完成の草稿が所蔵されている。開学に先立って、講義を受ける学生のための法律用語辞典を作成しておかなければならないという思いがあつての試みである。それが未完成のままに終わったことと合わせ、日本語を用いた法学教育の実践という課題が容易に達成できるものではない、挑戦的な試みであるということが最初から認識されていたことが分かる。

かし他方、日本語で書かれた過去の文献については状況が異なる。これは不思議なことだと言うべきではないだろうか。明治期以降になって言語そのものが大きく変容した日本においては、現代人が過去の文章を読むことはかなり困難だからである。例えば、江戸時代に記された学問書の多くは漢文であり、専門家以外にはまるで手が出せないのが普通だし、明治期に書かれた漢文訓読体の文章や候文でさえ、読みこなすことは容易ではない。日本においては、過去の文章は近くて遠い存在である。しかし、興味をもった読者が手軽に手を伸ばせるようなものとして過去の日本の文章がテキスト化されるということは、西洋書の翻訳と比べて圧倒的に少ないのである。もちろん、その文字が何という文字であるかということすら判読し難いような手書き文字をも解読して活字にし、詳細な注釈をつけるといった作業は継続的に為されてきた。各思想家の全集や著作集、岩波書店の『日本思想大系』のような優れた仕事である。決してこれまでの日本研究者が怠惰だったわけではない。しかし全集や『日本思想大系』に掲載されている文章でさえ難解であることは否定できず、一般読者からすれば、それらの存在によって日本の思想、哲学に触れる機会が増すということにはならない。

西洋思想の古典や話題の新刊本を翻訳出版することに意義があり得ると同様、過去の日本語の文章を現代語訳することにも意義があり得る、そう考えるとところから、本書のプロジェクトは始まった¹⁰⁾。

しかし他方、日本研究に関わる専門家が現代語訳という試みに後ろ向きだったことに必然性があることも明らかであり、筆者にも、今なお右往左往する思いが残っていることは否定できない。過去の文献を読む際には、内容だけが重要だとは限らないからである。数ある類義語の中から敢えてどの語を選択して用いているのかによって、その思想家が過去のどの思想家に依拠してその問題を考えているかの手掛かりになることがある。文体の問題も重要である。過去の思想家たちは、表すべき思想内容に応じて文体を使い分けることがあったし、あるいは逆に表現すべき内容が文体の特徴にひきずられて変容するということもあったからである。現代人にとっては馴染みのない語を現代語に直し、文体も改めるという作業をしたのでは、テキストそのものを味わうことはできないのではないだろうか。さらには、本書では、解釈が複数あり得る部分や、記されている文章のみからは確定的な読解をなし得ない部分に対しても詳細な注を付けることはせず、付したい注釈の趣旨を反映させた訳文を考案するという原

10) 以上のような問題に気付いた経緯については、『西周 現代語訳セレクション』の「はじめに」に詳しく記してある。

則を定めてある。原文と対照するならば、ニュアンスのズレや誤読に基づいた訳文になっている可能性がある部分は、訳者自身が気付いているものの他にも少なくないはずである。訳者の読解を読者に押し付ける結果になりかねないという側面があることは否定できない。そんなことをしてしまって、本当に良かったのだろうか。

以上の問題は、鼎談が実現していれば、前川先生から強く指弾されることになっていたはずの事柄と思うが、筆者自身も共有している思いでもある。他方、ヘンナ・ローゼンブラット『リベラリズム 失われた歴史と現在』（青土社、2020年）の翻訳に関わった川上先生からは、西洋思想の文献を翻訳する際にも、同様の問題があるという指摘が為されたのではないかと思う。キーワードを日本語に直すのか、原語のままアルファベット表記するののかという問題があることは周知のことであろう。同書においては、タイトルが「リベラリズム」とカタカナ表記になっているが、もちろん全ての西洋由来の名詞がカタカナやアルファベットで表記されているわけではない。そこには訳者達の決断が介在している。翻訳する際には原著の文体の雰囲気まで反映させたいという発想も生じるはずだが、ならば文体が難解であるとして名高い思想家の文章を翻訳する際には、敢えて分かりにくい日本語で翻訳すべきであろうか。そうすべきだという発想をとことんまで突き詰めていくならば、あらゆるテキストは原文のままで読まなければならないということになるだろう。そういう決断をしたとしても、問題が即座に解消するわけでもないという現実がさらに我々に追い打ちをかける。原文で読む場合でさえ、用語や文体選択の真意にまで思いを巡らせることができるようでなければ、テキストを理解したことにはならないからである。江戸時代中期に活躍した儒学者である荻生徂徠は、古代中国で記された儒教の経書を読む際には、現代中国語を習得し当時の歴史的背景を知り、その書が成立した同時代の書を広く読み、その経書を著した本人と同じように物を考え書けるようになってはじめて、真の読解が可能になるという議論を展開している（『徂徠先生答問書』）。古代中国人が着ていた服を着、食べていたものを食べるのでなければ、テキストの真意を理解することはできないのかもしれない。徂徠やその門人達は、それを実践しようとしていたらしい¹¹⁾。納豆ご飯などを食べていては、洋書を正しく読むことなどできないということになるだろうか。納豆ご飯の下りはともかくとして、基本的な趣旨としてはその通りであろう。しかし、それが出来る者だけが学問に触れることが許されるのだと考えるべきなのであ

11) 渡辺・前掲注2)。

ろうか。この問題は、目賀田種太郎が直面した問題として理解することができる。

本書は、原文の用語や言い回しを出来るだけ平易な日常語に変換するという方針を選択したが、少しでもその副作用を減少させようとする努力は行った。例えば、漢籍や西洋思想の知識、同時代の政治状況、論争状況などが前提となっているものの、西自身はそのことを明記していないという部分に関しては、典拠の内容を訳者の言葉で補足した上で訳している場合がある。例えば、『百一新論』にある「佛肝ガ中牟デ謀反ヲ企テタ時ナドデモ能ク知レタヲデゴザルガ」という部分は、『論語』陽貨篇に出てくる、中牟という町で謀反を企てた仏肝という人物からの招聘に応じようとしたエピソードでも明らかです」とした上で、「謀反を疑われるような人物からの招聘に応じようとしたということは、それだけ実際に政治に関わることを欲していたということなのでしょう」というように、その内容を補足して訳した。出典を含めた訳文を作成することが困難な部分に対しては、原文の通りに直訳した上で注を付して語の出典についての説明を施している場合がある。例えば、『百一新論』にある「孔子ニ衛ノ出公輒ヲ佐ケサシタナラバドウシテ治メルデゴザロウカ。唯名ヲ正スト云フ心得斗デハ行カヌ筈デゴザルガ」という部分は、「孔子が衛という国の出公輒の補佐をすることになったならば、どうやって治めたのでしょうか。単に「名を正す」という心得ばかりでは、どうにもならないはずなのですがね」と訳した上で注を付し、出典である『論語』子路篇の内容を含めて「名を正す」ということの意味を説明した。原文が漢字カタカナ交じり文で書かれているか、漢文で書かれているかを、現代日本語によって訳し分けることは不可能だったが、対話形式で書かれている『百一新論』に関しては、その雰囲気を反映させるよう敬体にした。

4. 現代語訳を試みたことの意義

副作用を減少させるよう努力したとはいえ、今なお、このような試みをしたことに対する確信があるわけではない。しかし、対象文献を全文残さずに現代語訳してみるという経験が、少なくとも筆者自身にとって大きな意義を持ったことに疑いはない。本書の作業は、全文を読みその全てを理解した上で、それを別の言葉で表現し直すという試みであった。該当史料を用いて論文を書く場合には、重要なのは論旨に合う部分であり、論旨に関わらない比喻表現の意味や出典などを無視もしくは軽視することも可能だが、訳書を刊行する場合にはそうはいかない。これまでは無視もしくは軽視していた箇所を何とか読解しようとする中で、初めて分かり得たこともあった。ここ

では、そのような例を二つだけ紹介したい。

第一に、「洋字を以て国語を書するの論」にある、「人、甘蔗を食ふ、苟も食ふなきは則ち已ん、今其佳境に至て之を止めんと欲ス、豈得べけんや」¹²⁾という記述である。「甘蔗」は「カンシャ」もしくは「カンショ」と発音し、サトウキビのことを意味するが、岩波文庫版『明六雑誌』の校注者による脚注では「砂糖のことか」とされている¹³⁾。当時の日本人にサトウキビを嚙ってみるという経験があったかは半信半疑なための解釈と思われるが、そう疑うのであれば、「カンショ」とも発音することを踏まえると、同じ発音である「甘藷」つまりサツマイモの誤記の可能性もあると考えることもできるかもしれない。いずれにせよ、現代語訳を試みなければならないという条件がなければ、敢えて解釈を試みようなどとはしていなかった部分である。しかし今回は、それをしなければならなかった。ヒントになったのは、「佳境に至る」の部分である。「佳境に入る」という表現は現代日本でも用いられる表現だが、元は古くから中国で用いられていた表現であり、サトウキビの尾の部分から食べ始めると次第に甘くて美味しい部分に到達するという様が語源となっている。「洋字を以て国語を書するの論」にある「甘蔗」は、砂糖のことでもサツマイモのことでもなく、まさにサトウキビのことだったと考えられる。西は、衣服、食べ物、住まい、法律、政治、風俗から、その他の技術・学術に至るまで、あらゆる分野で西洋由来の文物が流入し続けている現状を踏まえてそう述べていた。サトウキビの外見は竹のようであり、それと知らなければ口に含んでみようなどとは誰も思わないだろう。しかし、それを口に含み佳境（甘くて美味しい部分）にまで至ってしまえば、もはや止められない美味しさを持つ。それを精製した砂糖なしの食生活は、現にあり得ない。それと同じように、かつての江戸時代の人々は西洋の文物を下等なものに見下して触れようとしなかった。しかしその真価を知ってしまえば、もはや「止めんと欲」しても不可能だというのである。西は「松岡隣次郎宛書簡」（文久二年）において、「西洋の性理の学、又経済学等の一端を窺い候ところ、実に驚くべき公平正大の論にて、従来学ぶところの漢説とは頗る端を異にし候ところもこれあるかに相覚え申し候」¹⁴⁾と述べ、軍事や医学といった技術的な側面に限定して西洋の実力を肯定的に捉えるという当時一般的だった認識を越え、「性理の

12) 大久保利謙編『西周全集』第二巻（宗崇書房、一九六一年）五七一頁。原文の引用に際してはカタカナを平仮名に、旧字体を新字体に改めてある。

13) 山室信一、中野目徹校注『明六雑誌（上）』（岩波文庫、一九九九年）三三頁。

14) 大久保利謙編『西周全集』第一巻（宗崇書房、一九六〇年）八頁。

学」や「経済学」つまり、哲学や政治に関係する領域でも、西洋の学問は儒教を凌駕しているとする見解を述べていた。そのような認識が普及していくことによって、以後の日本は西洋化に向けて邁進していくことになる。しかし西は、「洋字を以て国語を書するの論」においては、「止めんと欲」しても「得べけん」こととして西洋化を捉えていた。一度もサトウキビを口に含むことがなかったならば生涯口にせずに済ませることも可能だが、一度口にしてみれば、もはや無しに済ませるわけにはいかない。同じように、一度西洋の文物に触れてその佳境にまで至ってしまった以上、西洋化を押し止め古き日本のあり方に立ち戻ることは不可能だという認識を西は述べているのである。西洋化は、必ずしも理想としてのみ捉えられていたのではなく、押し止めることができない流れとして認識されていたと言えよう。このような西の西洋観は、今回の作業がなければ認識できなかったことであった。

二つ目は、「教門論」における「今これを駕して上らむとすれば則ち強為に属す。鴻臚部の応酬に至りてその名義すなわち乖く。故に詔誥命令の間総てこの意を体すべし」という記述である¹⁵⁾。筆者にとっては意味不明な記述であり、これもまた読み飛ばしていた部分であった。共訳者並びに協力者の知恵も借りた上で、本書では以下のよう

各国の君主はそれぞれの国の政治の大権を有するという点で対等なのだから、日本の皇室のみを太陽神の権威と結びつけたりすることによって、天皇家を他国の王室よりも上位に位置付けようなどとしてはならない。もしも天皇家を過度に神聖化すれば、それぞれの国家を対等なものとして扱うという国際関係の原則から外れることになり、外交上のやりとりにおいて不具合を生じさせることになるからである。そのため、詔勅などの公文書においてもこの点を考慮し、天皇家を他の王室に優越する至高の存在とするような表現を用いないように注意しなければならない。¹⁶⁾

天皇を「統治権を総攬する」主体としてではなく、立法権、司法権による抑制を受ける行政権の長としてのみ位置づけ、それを「万国共にこれを同うするの制度にして独り本邦のみ然るに非ず」とする「軍人訓戒関係稿本」の記述¹⁷⁾や、「君主たる者その権

15) 同上、五〇〇頁。

16) 前掲注3)『西周 現代語訳セレクション』二三七頁。

17) 大久保利謙編『西周全集』第三卷(宗崇書房、一九六六年)一一五頁。

力固より無限なり。然れども一向に無限になれば遂にその天職に背く事無きこと能は」ざるため「近世始めて此有限君主政治を發明し以て天職に背く事無からしむ」ようになったとする「憲法草案」「編次大意」の記述とも一致する発想だが¹⁸⁾、それを権力制限という観点のみならず、国際関係という観点から論じている点に特徴がある。西における国体理解の問題として、興味深い部分である。

本書刊行に向けた作業は、これまでの自分が、いかにいい加減に史料を読んできたのかということに自らに突きつける作業でもあった。そしてまた、定期的に開催した共訳者である相原耕作先生、島田英明先生らとの読書会や、難解箇所についてアドヴァイスを求めた澤井啓一先生（恵泉女学園大学名誉教授）や、高山大毅先生（東京大学准教授）たちとのやり取りを通じて教えられることは極めて多かった。本書の試みは、少なくとも筆者にとっては極めて有意義なものであったことだけは確かである。

もちろん、筆者自身のために作業が為されたわけではない。本書が、読者に西周の文章と思想に触れる機会を提供することにつながってくれればと思う。さらに言えば、本書の読解に疑問を抱いた読者が原文にも手を伸ばすきっかけを提供することにつながるなどということがあれば、望外の幸いである。

※本稿は、令和2年度専修大学研究助成個別研究（研究課題「日本近代思想の再検討——democracyという観点から」）の研究成果の一部である。

18) 前掲注12) 二二一頁。